

## はしがき

今日、子どもも大人も含めて、人々のモラルの低下を指摘する声は大きい。そして、学校の道徳教育によせられる期待は、いっそう大きくなっている。

本書は、今日の学校で行われている道徳教育について、あらためて考えようという趣旨で編集されたものだ。大きな特徴は、道徳の学習指導要領の内容を教育哲学的に読み解くことにある。「教育哲学的に」読むといわれると難解なイメージがあるかもしれないが、そうとも限らない。本書の第3章から第8章に示されている通り、具体的で当たり前のことについて述べられているものが多い。ただ、その内容は、単に学習指導要領を文字通り読むだけでは見えてこない、ことがらの深さや広さに光をあてるものになっている。

同じことを、次のように言い換えることもできる。

本書巻末に掲載されている道徳の学習指導要領を、まずご覧いただきたい。「相手のことを思いやり、進んで親切にする」とか、「生命がかけがえのないものであることを知り、自他の生命を尊重する」など、ここには当たり前のこと、私たちがよりよく生きていくための、素朴で大切なことが書いてある。読みやすく、平易な内容といってもよいだろう。内容が難しくて意味がわからないという人は、ほとんどいないのではないだろうか。

しかし、このわかりやすくして当たり前のことを子どもたちに教えることが、——そして、なかには大人であってもそれらを日々、実践することが——とても難しい。だからこそ、この「当たり前」の中身を、あらためて吟味して確認することからはじめよう、というのが本書の趣旨である。

子どもに道徳を教えるとき、理由を説明して納得させることができることばかりではない。適切な言葉が見つからないと、私たちはしばしば説明を省いて、「それが当たり前なのだから、ちゃんとしなさい」ということになる。そうとしかいいようのない状況は、たしかにある。また、立派な道徳観念や倫理的な思想は、実践すると、とりたてて目立つことのない、ありふれたことに見えるものだ。だが、そのありふれた日常の細部にこそ、道徳や倫理を支える礎

があるともいえる。

このように、言葉による説明に限界を感じるような状況に際して、あるいは、ありふれた日常を表すのに際して、「当たり前」という言葉は便利である。だが、「当たり前」という言葉を便利に使うだけではなく、それがさし示すことがらに丁寧に思考をめぐらせることは、「当たり前」を本当に大切にすることにつながるのではないだろうか。

そして、今日のように人々の生き方の多様化や多文化化が進む複雑な社会においては、各人の考える「当たり前」が異なることが当然あり、そして、それゆえ人間関係に諸々の軋轢や葛藤が引き起こされる場合もあるだろう。そうしたなかで、各々の「当たり前」に丁寧に思考をめぐらせることは、他者の声を聴くこと、そして自らの思考の枠組みを問い直すことにつながると考えられる。自他を含めた多様な声を大切に、それらに丁寧に応答すること。これは、今日のような複雑な社会を生きていく私たち大人にとって、そして子どもたちにとって、きわめて重要な思考のレッスンであるといつてよい。

本書の第Ⅱ部（第3章から第7章まで）は、学習指導要領の内容に即して、当たり前の中身をつぶさに見ていく内容となっている。学習指導要領やその解説には書かれていないことにも触れ、過去と現在の考え方の違いを比べてみたり、より掘り下げて考えてみたりして、当たり前の中身を丁寧に考察している。

第Ⅲ部（第8章）は、さまざまな学校における道徳教育の実際に触れている。これらは、現職の学校教員の方々のご協力により、道徳教育に際して子どもたちに向き合うときの考えやときには迷いなど、日常感覚を伝えるものとなっている。現場の空気や学校教員として働くことの質感を伝える貴重な読みものともいえるだろう。また、制度やその背景にある思想が日本の学校教育とは大きく異なるシユタイナー学校での道徳教育についても紹介されている。

このように第Ⅱ部、第Ⅲ部の内容は、現在の道徳教育について書かれたものであるが、これらをさらに大きな視野のなかでも理解するために、本書では、第Ⅰ部（第1章と第2章）で道徳教育にかかわる歴史を概観している。

第1章では、日本の学校教育における道徳教育の変遷を取り上げている。学校における道徳教育にいま現在、携わっている人、これから携わろうとする

人、直接携わっていなくてもそのあり方を考えたいという人は、この章を読んでいただきたい。なぜなら、現在の学校における道徳教育を促進するにも批判的に継承するにも、それが形作られてきた経緯と過程を十分に踏まえておく必要があるからだ。第2章では、西洋の倫理と道徳の思想史を取り上げている。西洋の倫理と道徳の思想史を理解するには、古典哲学から現代哲学にいたる知識が素養として必要となる。日本の道徳教育を考えるのに、難解な西洋の思想史を学ぶのはなぜかと問う人もあるだろう。しかし、第Ⅱ部の教育哲学的解題のところにも散見されるように、今日の私たちが当たり前と考えていることの多くは、そのルーツを西洋の思想のなかにもつものでもあるのだ。道徳の問題は、学校教育の場で自己完結するものではなく、思想や時代の流れという太くて力強い水脈をもつ。第Ⅰ部（第1章と第2章）は、その水脈へと私たちをアクセスさせてくれる内容となっている。

本書は、必ずしも第1章から読まなければならないという類の本ではない。それぞれの章は独立したものとしても読めるようになっている。興味のあるテーマから読み進め、あちこちと読んで意外なところで話がつながっていることに気づくのも、面白いと思う。

「当たり前」のことを言葉にすること、またそれを自ら実践し、そして、育てていくことの難しさと大切さ。道徳教育に関心のある人々には、そうしたことをすでに実感している人も多いだろう。本書がその確認と出発、そして再確認と再出発の一契機になるなら、これほど嬉しいことはない。

最後に、本書の出版に際してお世話になった法律文化社の小西英央氏には、草稿にすべて目を通していただき、貴重なコメントをたくさんいただいた。ここに心よりお礼を申し上げたい。また本書は、教育哲学研究の領域に属する執筆者によって書かれている。忙しいなか、テキストの作成に向けて協力してくれた執筆者のみなさんに、心より感謝の意を表したい。

2012年7月

編者 岡部 美香  
谷村 千絵